

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：17102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370137

研究課題名(和文) 東南アジアにおける美術史学の成立に関する基礎的研究

研究課題名(英文) Basic Research on the Formation of Art Historical Studies in Southeast Asia

研究代表者

後小路 雅弘 (Ushiroshoji, Masahiro)

九州大学・人文科学研究院・教授

研究者番号：50359931

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、東南アジアにおける美術史研究史、すなわち美術史学の成立と進展状況、それぞれの特色について、各国の状況を比較しながら明らかにすることにある。一次資料の収集を広く行ったほか、東南アジアに固有の問題として、学術的な美術史研究が乏しく、美術展覧会の歴史や、美術史研究の当事者あるいは展覧会企画者の個人史の解明が重要な認識から、現場で美術史を作り、あるいは美術史形成の場に立ち会った当事者たちへのインタビューを行い、それをインタビュー集としてまとめることができた。オーラル・ヒストリーとしての東南アジア美術史、それも当事者たちの内面的な歴史としての美術史形成の一助となる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to analyze the history of the art history research in Southeast Asia. My focus is to analyze the formation of art history, the process of its development, and its unique characteristics by comparing different countries in the region. I have obtained primary resources and conduct interviews to art historians, curators, and art teachers. This research method is based on the belief that as art history is a new academic discourse in Southeast Asia, it is essential to keep records of the history of art exhibitions held in the region as well as the personal history of art historians and curators. These interviews are included in this report, which I hope will contribute to the formation of art history in Southeast Asia from a post-colonial perspective.

研究分野：アジア近現代美術史

キーワード：東南アジア 美術史 美術展 美術館

## 1. 研究開始当初の背景

研究代表者・後小路は、長年にわたり東南アジアの近代美術史研究に携わってきた。福岡市美術館、福岡アジア美術館の学芸員として、1978年から2002年まで、1～4回の「アジア美術展」をはじめとして、多くの東南アジア近現代美術に関わる展覧会を企画開催してきた。本研究に関する代表的なものとして「東南アジア 近代美術の誕生」展(福岡市美術館ほか 1997年)がある。2002年以降は九州大学大学院教授として、美術館学芸員としての経験、蓄積を基盤に、東南アジアを中心に広くアジアの近代美術史に関わる研究を続けてきた。その中で、東南アジア地域における美術史研究が、一握りのパイオニア的美術史研究者によって担われ、いまだ未成熟な状況にあることを痛感してきた。

一方で、東南アジアにおける美術史研究をけん引してきたパイオニア世代の人々、フィリピンのパラズ＝ペレス(Rodolfo Paraz-Perez)やマレーシアのレッザ・ピヤダサ(Redza Piyadasa)が他界し、さらにはパイオニア世代の美術家たちも陸続と世を去って、現在、関係者の具体的な証言を得る機会が急速に少なくなっている。

後小路は、これまで、生前のピヤダサへのインタビューを始め、フィリピンのエマニエル・トーレス(Emmanuel Torres)、さらには東南アジアの近代美術を実作者として担ってきた人々からの聞き取りを行って、その成果を研究成果報告書(基盤研究C「近代アジアの美術におけるモダニズムの受容」2004～2006年度科学研究費補助金 研究代表者:後小路雅弘)にまとめた。その後、インドネシアの画家スリハディへのインタビューを補足的に行った。そうしたインタビューにおける近代美術史研究を行う中で、東南アジアの近代美術研究は行われているものの、この地域的美術史そのものの歴史的な経緯や制度的な側面については、ほとんど研究されていないことを認識するに至った。

そうした「美術史研究史」研究の必要性という問題意識から、予備的な調査としてシンガポールの美術史家・キュレーターであるT.K.サバパシーへのインタビューを行い、またタイの美術史家ソンポン・ロドボーンにもインタビューを行った。

その過程で、たとえば、「美術」という用語は、インドネシアではSeni Rupa タイではSilpa など一定の共通性があると推測されるが、それらがいつ、どのように使われ始めたかについては、研究が行われていないだけでなく、研究者の間でもそうした問題意識自体が、そして、研究の必要性自体が認識されていないことが明らかになった。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、東南アジアにおける美術史研究史、すなわち美術史学の成立と進展状況、その特色について、各国の状況を比較し

ながら明らかにすることにある。とりわけ、東南アジアに特有の問題として、学術的な美術史研究が乏しいため、展覧会の歴史や、美術史研究の当事者あるいは展覧会企画者の個人史の解明にも力点を置く。非欧米圏としての共通性をふまえ、日本の美術史研究史と比較しながら、東南アジアにおける美術史学あるいは美術史研究がどのように生まれ、どのように進展してきたのか、あるいは進展していないのかについて、たんに文献的に考証するのではなく、東南アジアの美術史研究を主体的に担い、展覧会のキュレーション(企画構成)を行ってきた当事者たちのインタビューと議論によって、東南アジアにおける美術史研究史を、当事者たちの内面的な歴史として捉えることを目指す。

同時に、研究の過程で、東南アジア各国の美術史研究の歴史の研究という問題意識を、東南アジアの研究者たちと共有することを目指す。

## 3. 研究の方法

東南アジア地域における美術史学の成立と展開、美術史研究史を、以下の計画、方法によって明らかにしようと試みた。

(1) 美術史研究を当初から担い、切り開いてきた美術史研究のパイオニアたち(T.K.サバパシー、ジム・スパンカット、ソンポン・ロドボーンなど)からの聞き取り調査を行い、各国における美術史研究の概要や、その成り立ちについて、情報を得るよう務めた。またインタビューの過程で、たんに歴史的事実を把握するだけではなく、「美術史研究史」自体の研究や制度史の重要性を共有できるように務めた。

(2) 同じく、美術史研究を具体的に実現する場であった展覧会企画の当事者たちにインタビューを行った。具体的には、シンガポール国立博物館アート・ギャラリー創設期のキュレーターであるコンスタンス・シアーズとチョイ・ウェンヤンからの聞き取り調査を行い、シンガポールにおける草創期の美術館における展覧会をはじめ、作品収集や運営の在り様を把握することができた。また、聞き取り調査は、シンガポール国立美術館のキュレーターと共同で行い、その成果を共有するとともに、内容の確認を行って正確を期した。

(3) パイオニア世代の実作者であるインドネシアのスリハディなどに草創期の展覧会活動について聞いた。スリハディには、日本軍政期のプロパガンダ活動が地域的美術史に果たした

役割に始まり、戦後の独立戦争期の様々なグループが乱立した時期の活動、さらには、その後ジョクジャカルタのリアリズム派とバンドン工科大学を拠点にしたモダニズム派の論争、対立の実態、バンドン工科大学のモダニズム派の活動まで、インドネシア近代美術史の生き証人として、多くの事実を把握することができた。また同氏の保有する資料は貴重なものであり、写真撮影を行った。

- (4) 文献資料(展覧会図録を含む)の収集と分析を行った。タイのシン・ピラーシーの著作の収集はじめ美術史研究草創期の資料を集めた。また植民地宗主国の東南アジアにおける美術史形成に果たした役割の重要性から、フランスで、インドシナ美術学校関係の文献資料やパリでの植民地博覧会関係の資料を集めた。
- (5) フランスにおいては、文献調査に加え、仏領インドシナにおける美術史形成に大きな役割を果たしたと思われるフランス人美術家たちの当時の実作品を可能な限り実見調査した。また、インドシナからパリへやってきた美術家の貴重な作品も実見することができた。さらに、インドシナ美術史において重要な契機をなしたパリの植民地博覧会の資料を収集した。

#### 4. 研究成果

東南アジアの美術史研究者をはじめ、キュレーターなど美術史生成のキープレイヤーたちにインタビューをし、オーラル・ヒストリーとしての東南アジア美術史の基礎資料としてインタビュー集にまとめることができた。

インタビューを行ったのは、パトリック・フローレス、サンティアゴ・ピラー、ブレンダ・ファハルド(以上フィリピン)、ジム・スパンカット、スリハディ・スダルソノ(以上インドネシア)、T.K. サバパシー、コンスタンス・シアーズ、チョイ・ウエンヤン、ヤオ・マントン(以上シンガポール)ソンボン・ロドボン(タイ)等である。

また、東南アジアにおける美術史の形成に関わる一次資料を収集したほか、フランスにおいて、植民地インドシナに創設されたインドシナ美術学校はじめベトナム美術史に関わる資料を収集することができた。具体的には、インドシナ美術学校創設者であるヴィクトール・タルデュー関係の資料と、インドシナの同時代美術を初めて対外的に展覧会として紹介したパリの植民地博覧会に関する資料を収集した。また、20世紀前半、仏領イ

ンドシナに滞在したフランス人美術家たちの作品の調査を行った。その成果は、第36回アジア近代美術研究会(福岡市・福岡県立美術館)において「植民地宗主国フランスに探るベトナム美術史の形成」と題して発表した。

さらに、研究期間中シンガポールに国立美術館が誕生し、東南アジア美術史が展覧会のかたちで形成された現場に立会い、同美術館キュレーターや関係者などと議論をし、その成果を、ほかの東南アジア美術史研究者とともに本にまとめることができた。この本は東南アジア美術史研究の基礎的な資料となるだろう。書名は Charting Thoughts: Essays on Art in Southeast Asia (Low Sze Wee & Patrick D. Flores 編)で、後小路は、成果を「東南アジアにおける美術の誕生 1900年～1945年(The Birth of Fine Art in Southeast Asia, 1900-1945)」の章にまとめた(英訳 Maiko Behr, pp.126-135)。

東南アジアにおいては、おおむね1930年代に「美術」概念が導入され、近代的な意識を持った美術家グループが活動をはじめ(フィリピンの13モダニズム、インドネシアのプルサギ、シンガポールの華人美術研究会など)、また美術学校(シンガポールの南洋美術専科学校、バンコクのシルパコーン美術学校、ハノイのインドシナ美術学校など)も「美術」概念の実体化に大きな役割を果たした。それらの活動の中から、「美術史」の形成につながる萌芽が見られた。そうした活動を主導したのは、主に外国人であった。先述したインドシナ美術学校初代校長のヴィクトール・タルデューやシルパコーン美術学校創設者のシルパ・ピラーシー、南洋美術専科学校校長としてアモイから招かれた林学大、それからマラヤ大学美術館キュレーターであったマイケル・サリヴァンやクアラルンプールの国立美術館初代館長のフランク・サリヴァンらも、東南アジアにおける美術史研究の初期の段階で、決定的な役割を果たした。このように東南アジア域外からきた人々が、美術史学の発展に関し、多大の貢献をしたのだが、もちろん域内からも重要な役割を果たした人々が登場した。インドネシアでプルサギを主導したスジョヨノ、フィリピンの13モダニズムを組織したヴィクトリオ・エダデスなどは、東南アジア初期の近代美術運動の中で作り手として、あるいはオルガナイザーとして主導的な役割を果たしたばかりでなく、言説の面でも、大きな役割を果たしている。こうした人々に関わる資料を収集することができた。

また、こうした東南アジアの域外から東南アジアに来て、それぞれの国の美術史に大きな役割を果たした人々の中には、日本人の美術家たちもいたが、東南アジアにおける美術史草創期の日本人の活動とその影響は、予想した以上に大きなものであったし、あるいは予想はされてはいたものの、これまで詳細が

不明であった日本人美術家の事跡が多少とも明らかになってきたことも、本研究の成果であった。

たとえば、カンボジアにおいて戦中から1950年代まで国立美術学校で教鞭を執った鈴木重成がカンボジア美術史の形成に果たした役割については、これまで一般にほとんど知られておらず、その具体的な事跡も不明であったが、文献調査によって多少解明することができた。その成果は、「カンボジアのSUZUKIを探して」(『しるば』1号 pp.9-11 2016年5月)に示した。また、「インドネシア近代美術の父」といわれるスジヨノの先生として、インドネシアではその名を知られる矢崎千代二や、インドネシア初期の風景画(ムーイ・インディ=麗しの東インド)の画家として活躍した森錦泉、あるいは、戦中から戦後にかけてタイで影響力のあった里見宗次など、まだ未解明な部分も多いが、今後東南アジア近代美術史の形成を考える上で、日本人が果たした役割について考えていく端緒となる資料を集めることが出来た。その成果は、「麗しの東インド 森錦泉の終わらない旅」(『しるば』2号 pp2-4 2017年3月)にその一端を記した。

また、東南アジアにおける美術史形成の上で、美術館の果たした役割は、展覧会の開催やコレクションの形成を通してみることができる。先述したマイケル・サリヴァンが、マラヤ大学美術館の活動を通してこの地域の美術史に関わったことは、サリヴァンの初期の教え子であったサバパシーへのインタビューでその具体的な活動を知ることができた。またシンガポールに新たに作られた国立美術館の前身として、国立博物館アートギャラリーががらりあがったが、初期のキュレーターであるチョイ・ウェンヤンとコンスタンス・シアーズへのインタビューによって、その活動についてある程度把握することができた。

さらに、国際交流基金アジアセンターが、これまでのアジアの近代現代美術に関わる重要な文献を集めてアンソロジーとして刊行、英語文献は日本語に日本語文献は英語に翻訳し和英併記で出版したが、後小路のふたつの論考(「態度としてのリアリズム 90年代のアジア美術」1994年/「失われた無垢なわたし という他者」2010年)が所収され、後者は初めて英訳された。これもまた、東南アジア美術史の形成に関わる成果といえよう。

なお、東南アジアの中では、ミャンマーだけが現地調査をできないままに終わった。今後の課題として残った形だが、文献の収集は多少できたのと、作品は、シンガポール国立美術館やシンガポールの画廊、そして福岡アジア美術館で実見することができた。

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 6件)

後小路雅弘「態度としてのリアリズム 90年代のアジア美術」『The Japan Foundation Asia Center Art Studies 東南アジア美術の歴史を形づくる』3号 pp125-130 国際交流基金アジア・センター 2017年3月 査読なし(再録)

後小路雅弘「失われた無垢なわたし という他者」『The Japan Foundation Asia Center Art Studies 東南アジア美術の歴史を形づくる』3号 pp177-182 国際交流基金アジア・センター 2017年3月 査読なし(再録)

後小路雅弘「麗しの東インド 森錦泉の終わらない旅」『しるば』2号 pp2-4 2017年3月 査読無し

後小路雅弘「ピラー先生のルナ発見の旅」『しるば』2号 pp4-5 2017年3月 査読無し

後小路雅弘「カンボジアのSUZUKIを探して」『しるば』1号 pp.9-11 2016年5月 査読無し

後小路雅弘「アジア美術におけるゴーギャン的なもの」『民族藝術』31号 pp.47-51 2015年3月

[学会発表](計 7件)

後小路雅弘「東南アジアにおける美術の誕生とリアリズム」表象文化論研究会 東京大学駒場キャンパス 18号館(東京都) 2016年12月21日

後小路雅弘「可視化される美術史 ナショナル・ギャラリー・シンガポール」第40回アジア近代美術研究会 福岡市美術館(福岡県福岡市) 2016年6月25日

後小路雅弘ほか「シンポジウム 日本は東南アジアの現代美術にいかに関わってきたのか?」国立新美術館(東京都) 2016年2月27日

後小路雅弘「カンボジアのスズキを探して」第39回アジア近代美術研究会 福岡県立美術館(福岡県福岡市) 2016年1月16日

後小路雅弘「東南アジアにおける美術史学の成立について」第37回アジア近代美術研究会 福岡アジア美術館(福岡県福岡市) 2015年6月13日

後小路雅弘「植民地宗主国フランスに探るベトナム美術史の形成」第36回アジア近代美術研究会 福岡県立美術館(福岡県福岡市) 2015年2月28日

後小路雅弘ほか「アジア美術におけるゴーギャン的なもの」民族藝術学会 創立30周年記念大会公開シンポジウム「接触領域の芸術 美術・音楽・芸能」国立民族学博物館(大阪府吹田市)2014

年9月21日 招待

〔図書〕(計 2件)

Ushiroshoji, Masahiro etc., "Charting Thoughts: Essays on Art in Southeast Asia" editor: Low Sze Wee & Patrick D. Flores, Singapore: National Gallery of Singapore, 2017, 483 (Ushiroshoji, Masahiro 'The Birth of Fine Art in Southeast Asia, 1900-1945' translated by Maiko Behr, pp.126-135)

後小路雅弘ほか『日本美術全集 18 戦争と美術』小学館 2015年 311 (後小路雅弘「東南アジアにおける美術の誕生と日本の戦争」pp215-217)

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

後小路 雅弘 (USHIROSHOJI, Masahiro)  
九州大学大学院人文科学研究院・教授  
研究者番号：50359931

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

( )